

おじいさんや  
おばあさんが  
体験した  
大切な大切な  
お話の数々。

# 私の戦争体験

第  
38  
集

私の戦争体験 p4～p7

私の戦中・戦後体験 p8

軍隊村の近くで育ち、赤紙一枚で戦地へ p10

私の戦争体験 空襲警報 p13

私の戦争体験 p14

私の戦争体験 母の日記より p16

徳島市大空襲体験談 p18

戦災時の思い出 p20

私の戦争体験 忘れられない光景 p22

巻頭特集

憲法学者 木村草太さんに学ぶ  
「憲法と安全保障法制」について

〈キリトリ線〉

**5** あなたのお住まいの地域で「戦争体験を語り継ぐ会」が開催されれば、  
参加したいと思いますか？ (イ) はい (ロ) いいえ

**6** 戦争体験者は、高齢となり自分で書かれるのは、困難な方も多いと聞きます。  
あなたは、そのみなさまの戦争体験を聞いて、原稿を書くボランティアがあれば、  
参加したいと思いますか？ (イ) はい (ロ) いいえ

**7** あなたのほかに「私の戦争体験」を読まれた方はおられますか？

(イ) いる (ロ) いない

●それはどなたですか？ (イ) 配偶者 (ロ) 子ども (ハ) 孫 (ニ) 友人 (ホ) その他  
読まれた方の感想があればお聞かせください。

**8** 「私の戦争体験」〈第38集〉をお読みになってのご感想をお聞かせください。

**9** 最近、平和について考えたことを教えてください。

●これを読んでくれた子どもたちにお聞きします

**10** お父さんやお母さん、おじいちゃんやおばあちゃんから  
戦争体験を聞いたことがありますか。 (イ) ある (ロ) ない

**11** 「ある」とお答えの方にお聞きします。聞いた体験談を  
ご家族やお友だちに話したことがありますか。 (イ) ある (ロ) ない

ご協力ありがとうございました。



## 私の戦争体験

富田林市 伊倉 澄子(85歳)

昭和十九年堺大空襲の後、姉(女学校三年生)、私(同一年生)と下校の途中、空襲警報のサイレンが鳴ったので、近所の防空壕に入ったが、機銃掃射の恐

い目にあった。操縦士の顔が見えるくらい急降下してきました。昭和二十三年三月十三日、堺空襲で私達の住んでいた処に焼夷弾が落ちてきて焼野原となりました。北庄町の自宅の仏壇の前、竈さんの前とか、数発の焼夷弾が落ち、家に残った父と私とで避難用の手荷物で消したものでした。幸いにも不発弾だったので、自宅、両隣は消失をまぬがれました。そして、どうして富田林市甲田に辿り着いたのか、いまだに思い出せません。必死に父の後をについて行ったのでしょね。

初めて聞く、昭和天皇の玉音、終戦でした。七十年前のこと。夢のような、不思議な、気がします。

## 私の戦争体験

八尾市 左近 博(84歳)

戦争が終焉を迎えようとする昭和二十年、警防団からの指示でラジオは「戦況がわかるように」と、いつも点けていた。三月十七日、「臨時ニュースを

申し上げます」と言って「紀淡海峡を敵機ボーイング29爆撃機60機編成が北進中」という知らせだった。薄暗くなった夜、一番機が西神戸上空に現れた。照明弾を投下した。たぶんパラシュートにでも吊るされたのか、ゆっくりと降下して周囲を照らし出した。真昼のような明るさで、今まで経験したことがない光であった。それから一機、又一機と飛来して、焼夷弾を投下した。機体から真っ赤なものが落ちてきて、途中で爆発して白い雲のような塊ができる。その雲のような塊から、小さな線香花火のような赤いものが糸を引くように落下してくる。

この様子は戦後発行された「婦人公論」の記事を読んで、内容が明確になった。内容は概ね次のようなものであった。

B29から落とされた焼夷弾は(ここでは親爆弾としておく)真っ赤に燃えながら落下して、途中で小爆発する。そして白煙に包まれる。そのとき、72発の小爆弾に分裂する。小爆弾は直径約10センチの六角柱で長さは50センチ程。その一方に油が付着した50センチ程の長さの布が付いていて、小爆発のとき、その布が燃えながら地上に落ちてくる。布が燃え尽きると火薬が爆発して直径10メートルの火の玉となって30分ほど燃え上がる。

さて、焼夷弾攻撃のあと、数日たって私は学校の最寄駅である「大開道」駅まで、山陽電車で行ってみた。あたり一円焼け野が原となり、あちこちで小さな煙が上っていた。そして少し歩いて驚いた。人が焼け死んで、その姿は裸のマネキン人形と同じようで、衣服は焼失して、頭の髪の毛も丸焼け、そして足の裏には、おそらく靴が焼けて焦げ付いたのだろうか、黒い塊が付着してい

### 女学校

戦前(せんぜん)の女子教育機関(じょしきやういくかかん)の名称(めいしやう)。

### 空襲警報

敵軍(てきぐん)の航空機(こうくうき)による爆撃被害(ばくげきひがい)が出(で)ないように、市民(しみん)に知(し)らせる警報(けいほう)。

### 防空壕

敵(てき)の航空機(こうくうき)の攻撃(こうげき)をうけから避難(ひなん)するために地下(ちか)に造(つく)られた施設(しせつ)。

### 機銃掃射

機関銃(きかんじゆう)で敵(てき)をなぎ払(はら)うように射撃(しゃげき)すること。

### 焼夷弾

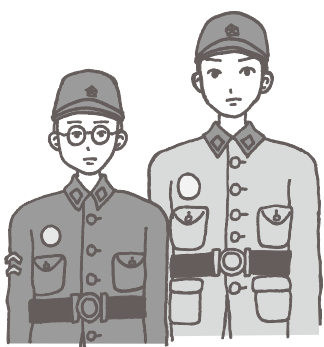
焼夷剤(しょういざい)「発火性(はつかせい)の薬剤(やくざい)の入り(はい)った爆弾(ばくだん)。攻撃対象(こうげきたいしょう)を焼(や)き払(はら)うために使用(しよう)する。

### 玉音

天皇(てんのう)の肉声(にくせい)。昭和二十年八月十五日正午(しょうわにじゅうねんはちがつじゅうごにちしゅうご)に放送(ほうそう)された、昭和天皇(しょうわてんのう)による終戦(しゅうせん)を知(し)らせる放送(ほうそう)を玉音放送(ぎよくおんほうそう)という。

### 警防団

地域(ちいき)の警備(けいび)、消防(しょうぼう)や防空(ぼうくう)などのために作(つく)られた国(くに)の組織(そしき)、団体(だんたい)。第二次世界大戦中(だいにじせかいせんちゅう)に作(つく)られた。昭和十四年(しょうわじゅうよねん)設立(せつりつ)、同(どう)二十二年(にじゅうにねん)に廃止(はいし)。



### 照明弾

夜間(やかん)の戦闘(せんとう)で、目的地(もくてきち)の照明(しょうめい)や信号(しんごう)に用(もち)いる弾丸(だんがん)。数秒(すうびよう)から数分(すうぶん)光(ひかり)を発(はつ)する。



2016年8月



る。その人形のような死体を山のように積み上げている。警防団の人達である。なかには、焼けて赤くなったトタンの上にチョークで「仏二体」などと、書かれていているものもある。山積みされた死体は、腐敗が進むのでガソリンをかけて野焼きするそう。誰の遺体か、また仏は誰なのか？ そんなことを確かめる余裕などない。帰るとき、「大開道」の駅で生き残ったと思われる数人の人がいた。焼けた火の中を避難したのか、どの顔も発狂しているようで目つきがまともではない。

幼いころに見た「地獄絵図」がそのまま、現実の世界となっていた。

これは誰の責任だろうか？ 誰がどのようにして処理するのだろうか？

あまりの恐ろしさに声も出ず、一目散に電車に乗って帰宅した。

私の戦争体験のページである。旧制中学一年生の終りのことだった。

## 私の戦争体験

松原市 山田 哲(90歳)

私は日中戦争で父を上海上陸作戦の際失い、そして自身も、昭和二十年六月に現役兵として召集を受けて、独立歩兵大隊の一員として長崎へ出征しました。召集を受けた直後、駐屯していた八尾恩智の小学校から軍用列車で山

陽線を西下し、広島で同乗していた工兵大隊を下ろした列車で鳥栖経由で長崎に入りました。それは、八月の二日から三日のことですが、長崎市内に入ったものの駐屯する場所がないので、10軒(キロメートル)程山越えて南下したところの海岸に面した為石村小学校に入りました。その後、長崎に原爆が落ちるまで機関銃操作等の訓練を受けていました。原爆が落ちたときは丁度、校庭で訓練中で大きな爆風と閃光を感じ、私等兵士は全員「あれは新型爆弾にちがいない」と感じていました。その夜、先遣隊が市内へ急行し、残った人員は後片付けをした後に続行しました。

私は後続隊の一員として入市し、長崎港近くの戸町小学校に駐屯することになりました。それから九月中頃までは、この場所から毎日使役として負傷者の担架による移動と道路の補修に携わりました。幸いにも、その間は怪我や病気になることもなく過ごせました。

終戦の詔勅の後も復員させてもらえず、他地域から続々と復員引揚してくる人達を羨ましく眺めながら使役を続けました。そして九月十六日、二日ばかりで貨物列車に牛馬のように揺られながら母たちが疎開していた河内松原に帰ってきました。帰郷(帰宅)の後、暫くして歯茎から血が出たり、皮膚炎が出来てきたりしましたが、半年程でこれらの症状は消退しやれやれでした。色々辛いことに遭いましたが、直接の被爆から免れたことは幸運で、90歳まで長生きできたことを感謝しています。

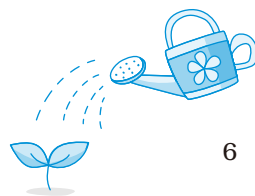
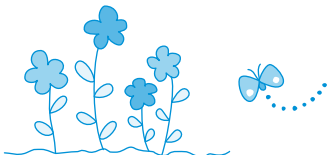
(私の所属した独立歩兵大隊は中部2828部隊と命名されていました。隊員の中には分り易く「にやにや部隊」だなど称するひとが居ました。)

旧制中学  
小学校(しやうがっこう)を終了(しゅうりよう)した男子(だんし)の高等普通教育(こうとうふつうきょういく)が行(おこな)われた学校(がっこう)がっこう。修業年限五年(しゅうぎょうねんげん)。



駐屯  
軍隊(ぐんたい)がある地(ち)にとどまること。  
閃光  
雷(かみなり)の稲光(いなびかり)のように、瞬間的(しゅんかんとてき)に発(は)つする光(ひかり)。

復員  
戦時体制(せんじたいせい)の軍隊(ぐんたい)の召集(しやうしゅう)を解(と)かれ、兵役(へいえき)を離(はな)れ、戻(もど)ってくること。



# 私の戦中・戦後体験

泉佐野市 泉 ミユキ(75歳)

昭和十六年生まれのは、戦争中は何も解らない赤ちゃん時代で、終戦でやっと四歳半であり、その殆どは覚えておらず、わずかな記憶としては、四歳頃だと思いますが、B29が家の屋根すれすれに飛んでゆき、家の中が、昼間のようにパツと明るく光ったのを今でも鮮明に憶えています。それ以来、飛行機の爆音に怯えています。

父が内地勤務だったと思われ、朝鮮人に割と親切で優しく接していたこともあり、「大野さん、大野さん」と慕われていて、色々な物を持って来てくれていました。

もう一つだけ思い出すのは、山の崖を削った窪地に父と二人で、爆撃を避けて隠れていた所へ朝鮮人が数人一緒にいた時のにんくの臭さに、子供心に参ってしまった事のみが、強く印象に残っています。その後のことは戦後の記憶と思われ、町中に朝鮮人がいたので、どの人が朝鮮人か、日本人かの区別が子供には解らず、私の一番仲の良かった友人が「林信子」という人で、その人は朝鮮人で、両のホッペがりんごの様に真赤で、顔がまん丸な女の子でした。とってもおとなしい人でした。

小学校にあがった時の記憶は、教室の後に沢山の朝鮮人の父兄が押し付けて来て、当時は多分新任教師であったであろう「西秋良策」先生という若い先生に「朝鮮語を教えろ、朝鮮語を教えろ」と大合唱して、授業にならず、蒼白な

顔をしていたのを憶えています。

母も心配して、よく教室の後で授業を見守っていてくれました。

そして町中には傷痕軍人が路端で軍服姿に白い包帯をして松葉杖を横に置き、頭を下げて前に置いた缶にお金を入れて欲しいらしい姿に、私は恐くて避けて通っていました。今から思えば、本当に申し訳のない行為でした。両親が傷痕軍人の意味をしっかりと教えてくれば、日本の為に戦った人を大切にしていなければならなかったのです。

でも、後々、偽の傷痕の人もいるのが解って一寸複雑な気分になりましたが、それも悲しみの一つです。

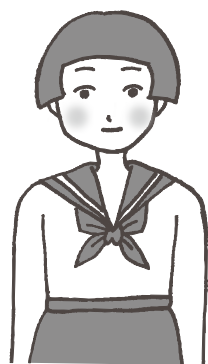
そして最後にあの「大根飯」だけは、どんなに母が工夫して作ってくれてもまずくて食べられませんでした。

二度とあの「大根飯」だけは食べたくないものだと思つづく思います。

日本の平和と世界中の平和を心から願ってやみません。

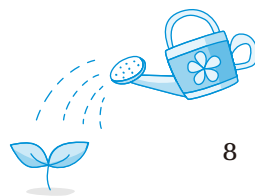
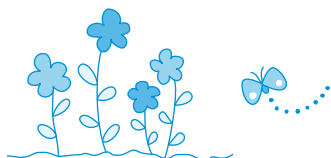
以上

事実のみです。



## 傷痕

戦争(せんそう)で身体(しんたい)に傷(きず)を負(お)うこと。傷痕軍人(しょうこんぐんじん)は、戦争(せんそう)で傷(きず)を負(お)った軍人(ぐんじん)をいう。





軍隊村の近くで育ち、赤紙一枚で戦地へ堺市北区市川 光(90歳)

「二度と戦争をしてはダメ」戦争によって何一つ得るものはないと、戦後七十年を経過した今もずっと思い過してまいりました。

私は大正十四年(一九二五年)生まれの九十歳ですが、幸か不幸か軍隊村のあった地域で生まれ育ち、現在の東三国ヶ丘校区と金岡公園一帯で馬上から軍刀を振りかざして演習の騎兵隊、大勢の軍人が隊列を組んでの行進、又戦地から帰還した傷痍軍人の陸軍病院での入院姿を毎日まのあたりに見て少年時代を送りました。

そして昭和十二年(一九三七年)七月七日中国北京郊外の盧溝橋に於いて日中両軍が衝突しこれが支那事変の発端となりました。

戦況が日増しに激しくなるにつれ日本軍の進攻が進み、昭和十二年(一九三七年)十一月十一日、上海を占領し、同年十二月十三日南京を占領することによって軍隊村の騎兵隊、輜重隊の兵士の出入りがますます激しくなりました。軍隊村から戦地に赴く兵士の見送り、又帰還部隊の出迎えが頻繁に行われ、その度毎にエプロン姿に襷がけの国防婦人会のお姉さん、おばさん達にまじって私達小学生も兵舎の向かい側の通路に並んで全隊員が終るまで行動を共にし、いつも夜明けの四時〜五時頃までかかりました。凱旋兵士を迎える姿を見ていると、意気揚々とした顔、疲れきった顔、又家族に会えるやれやれと思わせる顔、それぞれの思いをもって内地の土をふんだ兵士達。

しかし、隊列の前に戦友の遺骨(白木の箱)を首にかけた兵士達が目立ちました。出迎えに来られた方の中に、あの白木の箱との面会をされる方がどんな思いでされるのかと子供ながら悲しくなりました。こんな状況を今思い浮かべると、二度と子供や孫にこの様な思いをさせてはならないと決意を致しました。

又、私の通っていた当時の金岡尋常小学校が夏休み中、兵隊さんの仮宿舎として使用されておりました。夏休みが終り、兵隊さんは戦地へ行き、私達は学校に行くと、大便秘所の中にべっとりと血がついた跡形がありました。どうした事かと聞くと、軍隊の訓練の厳しさと、これから戦地へ行って殺し合いをするのだと思うと耐えられず、銃剣で自ら命を落とした事を耳にし、戦争の悲劇を少年時代から味わった一人です。

私の心の中で戦争はもういやだ。自分が軍隊に入るまで戦争が終ってくれ。「早く終れ」「早く終れ」と心の中で叫んでも、当時は口に出すことが出来なかつたものであります。

時が流れて、昭和十六年(一九四一年)十月十八日、東條英機が首相となり、いよいよ昭和十六年十二月八日未明、日本軍が真珠湾に奇襲攻撃を行い、日本は存亡をかけた太平洋戦争の始まりであります。

日本はもはや国家総動員体制がしかれ、男性はもとより女性も子供も戦争一色の中に呑みこまれて行きました。私にもいよいよ昭和十九年(一九四四年)九月五日に赤紙が家に届き、船舶兵として柳井に入営することになりました。

支那事変  
昭和十二年に始(はじ)まった日本(にほん)と中国(ちゅうごく)の大規模(だいきぼ)な戦闘(せんとう)のこと。当時(とうじ)の日本政府(にほんせいふ)が定(さだ)めた公称(こうしょう)で、両国(りょうこく)とも宣戦布告(せんせんぷこく)を行(おこな)ったことから、「事変(じへん)」と称(しょう)されてい(い)る。現在(げんざい)では日中戦争(にっしゅうせんそう)にちゅうせんそうとも呼(よ)ばれる。

輜重隊  
輜重兵(しちゅうへい)とは、水食料(みずしょくりょう)・武器弾薬(ぶきだんや)・各種資材(かくしゆざい)など様々(さまざま)な物資(ぶつ)の輸送(ゆそう)を主(おも)に担当(たんとう)する。

国防婦人会  
こくぽうふじんかい  
正式名称(せいしきめいしょう)は大日本国防婦人会(だいにほんこくぽうふじんかい)とい(い)い、一九三二年(せんきゅうひやくさんじゅうにねん)設立(せつり)の婦人団体(ふじんだんたい)。軍(ぐん)の支持(しじ)・指導(しどう)に組織(そしき)され、出征者(しゅっせい)の送迎(そうげい)や傷痍(しようい)の扶助(ふじょ)を行(おこな)った。

凱旋兵士  
がいせんへいし  
凱旋(がいせん)とは、戦(たたか)いに勝(か)つて帰(かえ)ること。手柄(てがら)をあげて帰(かえ)って来(き)た兵士(へいし)。

尋常小学校  
じんじょうしょうがっこう  
1886年(ねん)(明治(めいじ)19)小学校令(しょうがっこうれい)により設置(せつち)され、満六歳(まんろくさい)以上(いじょう)の児童(じどう)に初等普通教育(しよとうふつこく)を施(ほ)した義務制(ぎむせい)の小学校(しょうがっこう)。期間(きかん)は最初(しよ)が三(さん)年間(ねん)、1907年(ねん)から六(ろく)年(ねん)。41年(しやうわ)16)国民学校令(こくみんがっこうれい)により国民学校初等科(こくみんがっこうしよとうか)と改称(かいしょう)された。

奇襲攻撃  
きしゅうこうげき  
敵(てき)の予期(よき)しない方法(はうほう)で攻撃(こうげき)する戦術(せんじゆつ)のこと。時期(じき)や場所(ばしょ)を知ら(し)ないよう意表(いひょう)をつく攻撃(こうげき)。

国家総動員体制  
こくさどう員たいせい  
国(くに)にあるいっさいの資源(しげん)や機能(きん)を、戦争(せんそう)のために最(も)も有効(ゆうこう)に利用(りよう)するように統制(とうせい)した体制(たいせい)。政治(せいじ)・財政(ざいせい)から科学(かがく)や芸術(げいじゆつ)など、日常生活(にちじようせい)のすみずみにまで統制(とうせい)が及(およ)んだ。

赤紙  
あかがみ  
召集令状(しやうしゅうれいじよう)の俗称(ぞくしょう)。用紙(ようし)が赤(あかい)ことからこのように言(い)われた。軍隊(ぐんたい)に召集(しゅうし)する命令文書(めいれいぶんし)。





入隊する前から父親から軍隊という所は、運隊だからと常々聞かされておりました。  
小松島にて上陸用舟艇の訓練中に突然、同年十月五日船舶通信隊に編入を命ぜられました。

そして昭和十九年十一月某日、夜中の十二時頃、非常呼集がかかり、兵舎の広場に一列縦隊に並ぶよう指示があり、前から番号をかけて偶数番号は右へ、奇数番号は左へ移動して並んだのが後になってわかったのですが、命の分かれ目、運命の分かれ目であったのです。奇数番号で左へ移動した戦友達は、輸送船もろ共全員が台湾沖でアメリカの魚雷を受けて沈没戦死したとの事を聞き、私が若し、ひとり前か後に並んでおれば今の私が...

いつもそのことを思い出してこれが父親が常々言っておった第一回目の運隊だったのです。その後何回かの命拾いをして、二回、三回目の運隊の経験を致しました。

その後私は、中国上海付近で通信隊から別行動の部隊長付情報係を命ぜられ、日夜無線機を前にして情報収集しておりましたが、終戦末期日本の敗色が濃くなって来たにもかかわらず、部隊長には嘘の大本営発表の報告しか出来なかったのです。あの時、本当の報告をしておればどうだったのか...考えさせられる今日この頃であります。

戦争とは一体何だ？ 親、兄弟、姉妹、又恋人と愛別離苦した悲しい思いを二度と若者に味わってほしくないと、時ある毎に訴えている一人であります。

## 私の戦争体験

### 空襲警報

羽曳野市 八田 奈津子(83歳)

昭和二十年三月十三日夜の十一時すぎに、空襲警報が出た。家の中の防空壕に入って、ドンドンバリバリと音。家の中は火の海になっている。姉妹三人で外へとび出し小さい丘の上のお宮さんに逃げる時、夏ぶとんを水に漬け、ぬらして頭から被っても、顔も服もチリチリ焼ける。両方から火が迫ってくる火の中、お宮さんに着いた。たくさんの人が避難してる。

夜十一時から朝まで、丘の上から天下茶屋駅の周りが火の海に。高い所から見ていたので、自分の家が有ると思ったが三軒手前まで残っていたのに私の家は無くなっている。

家から駅まで、何百軒が瓦礫と灰になっている。焼跡で茫然として何もかも無くなっていったが涙も出なかった。疎開先の堺まで歩いた。昼ごろに着いた。母の顔を見て声を出して泣いた。家が焼けて直ぐ、父が兵隊に取られた。父と母から大阪が危ないので奈良の母方の祖母の所へ行くことになり、小学校に行く。田舎に来たのに、食料も無く、毎日お腹がへった。

警報のサイレンで、五人集団下校の帰り、畑の畔道で機銃掃射された。町屋の有る所まで逃げ、次のB29に撃たれ、余所の家に飛び込んだ。B29が通過したので外へ出てみると壁が穴だらけ。怖かった。思い出したくない。

戦時中(せんじちゅう)軍人(ぐんじん)のあいだで言(い)われた俗語(ぞくご)。「軍隊(ぐんたい)は運隊(うんたい)とは、どのような部隊(ぶたい)に配属(はいぞく)されるか、楽(らく)をするか苦勞(くるう)するか、生(いき)るか死(し)ぬかは運次第(うんしだい)だ」という表現(ひょうげん)。(うんしだい)だ」という表現(ひょうげん)。

#### 大本営発表

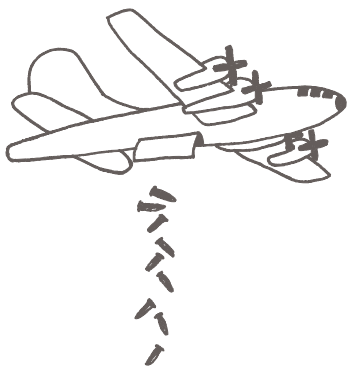
戦争中(せんそうちゅう)、大本営(だいいん)が国民(こくみん)に向(む)けて発表(はつぷ)した、戦況(せんきやう)の情報(じやうほう)。末期(まつき)には、戦況(せんきやう)が悪化(あくわ)しているのに優勢(ゆうせい)の発表(はつぷ)をくり返(かえ)した。

#### 愛別離苦

仏教用語(ぶつぎやうようご)。「八苦(はつこ)の二(に)つ。親(おや)・兄弟(きやうてい)・妻子(さいし)など愛(あい)する者(もの)と別(わか)れる苦(くる)しみのこと」。

#### 空襲警報

空襲(くしゅう)に備(そな)えた警戒用(けいかいよう)サイレン。



# 私の戦争体験

東大阪市 匿名(78歳)

わたしの戦争体験といっても幼い時のことであり、幼いなりに記憶していることを綴ってみます。生まれたのは大阪市大正区で昭和十九年は国民学校の一年生でした。国語ではカタカナの教科書を読んでいたのを覚えていますが、それもだんだん空襲も激しくなってきたり、授業中に空襲警報になると帰宅するのです。

その日の給食パン一つを持ち帰りました。夜もまた安心して寝る事はなく、警報が出るや防空壕に入るのです。寒い時季でもあり日常の服をきたままの就寝で、枕元にはカバン、防空ずきん、綿入れの着物を置き、いざとなるとこれらを持ち、父に抱かれて壕に向かったものです。日増しに回数も多くなりました。

防空ずきんといえば、住所氏名・血液型も明記している中でA型でしたが、後に成人になり検査するとAB型と分かりびっくりしました。

家の道路向かい側の家々が立退き取り壊されました。金属類の供出も行われ、私の家でも二階の窓の柵も取り外されました。戦争も激しくなり、我が家も岡山へ疎開する事となり、私が二学期を終えてから母と子供たちは親戚の家に身を寄せました。父は大阪に止まっていたが空襲で全焼になり、すべて失いました。戦後、ゼロからの出発で、両親は大変な苦労でした。

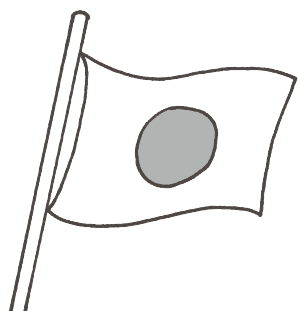
家の近くにあった国民学校も焼失し、先生や同級生の名前も覚えていませ

ん。楽しかった思い出といえば、映画館へ行ったり、近くの神社のお祭りには家の前あたりまでお店が並び、あれこれおもちゃを見て楽しみました。短い間の同級生の皆様もきつとどこかでお元氣にお暮らしの事と心より願っております。

二度と戦争をおこす事なく、若い世代へとしっかり平和のバトンを渡しつなげなくてはと思います。



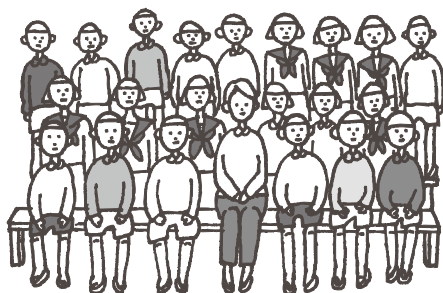
2016年8月



**防空ずきん**  
空襲(くうしゅう)のときに、落下物(らつかぶつ)などから頭(かぶ)を保護(ほご)するためにかぶった綿(めん)の入(はい)った頭巾(ずきん)。

**疎開**  
空襲(くうしゅう)・火災(かさい)など、戦争(せんそう)の損害(そんがい)を少(すく)なくするため、都市(とし)に集中(しゅうちゅう)している住民(じゅうみん)や建物(たてもの)を地方(ちほう)に分散(ぶんさん)すること。

**国民学校**  
1941年(ねん)(昭和(しょうわ)16)から47年(ねん)までの日本(にほん)の初等普通教育機関(しやうとうふつうきやういくきかん)。従来(じゆらい)の小学校(しょうがっこう)を改称(かいしやうしやうし)し、戦時体制(せんじたいせい)に合(あ)わせた国家主義的(こっかしゆぎてき)な教育(きやういく)を行(おこな)った。初等科(しやうとうか)6年(ねん)(ねん)、高等科(こうとうか)2年(ねん)を義務教育(ぎむきやういく)とした。





私の戦争体験

母の日記より

堺市北区 小林 俊子(79歳)

せんきゅうひやくよんじゅうごねんはちがつじゅうごにち  
一九四五年、八月十五日の終戦の日、私は小学校三年生の夏休みだった。未  
だ幼く、何が起こって何が終わったのか、把握できていなかった。第二次大戦の証  
人になるだけの知識も体験も十分ではないのだけれど、十二年前に九十五歳  
で他界した母の日記の中に、恐怖の体験が記されていたのを紹介することに  
した。

「とうとう夫(私の父。医師)に赤紙(軍隊への召集令状)が来た。久留米団に  
入隊。夫を送り出した後、医院(耳鼻咽喉科を開業していた)や自宅の整理の  
ため、四人の子どもを疎開先の淡路島に残して大阪に帰っていた昭和二十年  
三月中旬のこと。

朝から大阪に大空襲が到来した。私はかねて夫から教えてもらっていた通  
り、家の前に掘られた防空壕に入った。大きなヤカンに米を入れ壕の奥に置  
き、入口近くに体を丸くかがめて、両手を耳に当てた。二〇から三〇機位の編  
隊だったろうか。上空から急降下して爆弾を落とすのである。その時の気味  
悪い嫌な音は生涯忘れることはできない。

最初は高射砲によって反撃しているとの報告があったが、米軍の爆弾を落  
とす数が増え、最後に特別大きな音がして、壕が揺れ、天上の土がこぼれる程  
の爆弾が投下された。

しかも、我が家と裏の民家の間の道路だった。

噂では、二五〇キロとか五〇〇キロ爆弾とか言われた。幸い私は壕を飛び  
出て自宅と反対方向へと逃れて命拾いができた。

後に、自宅へ戻り、爆弾の落ちた場所を見たが、播鉢状の巨大な穴があい  
て、破れた水道管から水が吹き出していた。この空襲で、四人の方が亡くなっ  
た。

あの時、死んでいたら、ハオを頭に四人の子どもはどうなったかと考える  
と、身の毛が立ち立つ思いだ。」(ほぼ原文のまま)

以上が終戦後に書いた母の日記の一部だ。

私の父方の叔父は戦死。母方の叔父は戦地で感染したマラリアの後遺症の  
ため、長い間苦しむことになった。大学在学中に召集され戦死した親戚も  
いる。

戦争って何なのだろう。敵、味方に関係なく、尊い人命を無駄使いしている  
だけなのではないだろうか。

高射砲

航空機(こうくうき)を撃墜(げきつい)するための中小口径砲(ちゅうけいほう)で、うけいほう。陸軍(りくぐん)での言(い)い方(かた)。海軍(かいぐん)では高角砲(こうかくほう)と言(い)われた。



# 徳島市大空襲体験談

東大阪市 嶽 由子(83歳)

戦争当時、私は徳島市内で両親と姉妹弟と家族七人で暮らしていました。私は小学校六年生で十二歳でした。昭和二十年七月三日夜十一時頃、二階で寝ていた時に、警戒警報のサイレンが鳴ったと思ったら空襲警報も鳴らない間にドーンと大きな音と共に爆弾が落ちて、火の手が上がっていました。パジャマのまま、布団の横に置いていた洋服をカバンに入れて、妹と姉と三人で一階において両親達と一緒に外に飛び出しました。母は生後百日位の妹を抱いて、おむつとか赤ちゃんの衣類とか入ったカバンや袋を持って出ました。私も荷物持ちを手伝いました。防空壕には水が入っていて、燃えた木とか残骸が水につかると煙が出て、むせて涙とせきが出て苦しかったことを今でも思い出します。すぐ近くに小さな桃の木があったので、ぬらした蚊帳を家族でかぶって、B29が通り過ぎるのを待ちました。私の記憶では、シューシューと青い火を吹きながら、雨の様に爆弾が降って来た事を思い出します。父は何も入っていないカラッポの桐のタンスを家から出して、木の陰に置き、何とかタンスは助かりましたが、その時に目にやけどをしたみたいで、タオルを水にぬらしてずっと目を冷やしていました。

七月四日未明には大きなタライみたいな、太陽が真赤に燃えている様に見えた事が印象に残っています。

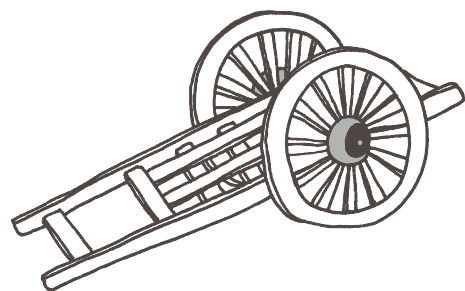
私達子供達は、「お腹すいたなあー。」と焼け残った金のバケツを持って町内を物色しました。漬物屋さんのタクアン漬の木の桶が焼けているのですが、中は水分が多いので、中のタクアンは焼け残っていたので、近くの井戸水で洗ってボリボリかじって食べました。昼過ぎに、父親の田舎のおばさん達がおにぎりやおかずを持って迎えに来てくださって、田舎へ帰ることになり、大八車に父親を乗せて先ず目医者へ連れて行かなければと表通りに入る四つ辻に、亡くなられた人達を山の様に高く積んであったのを見て、子供心に悲しかったことをよく覚えています。

田舎の近くの目医者さんに治療をしてもらってしばらく毎日お父さんを大八車やりやカーに乗せて、しばらく目医者に通いました。戦争は多くの人々の命を失い、ほんとにみじめです。今でも戦争映画は見る気がしません。

警戒警報  
敵機(てつき)の空襲(くうしゅう)のおそれがある場合(ばあい)に出(だ)された警報(けいほう)。

蚊帳  
蚊(か)を防(ふせ)いで安全(あんぜん)に睡眠(すいみん)ができるように、夜具(やぐ)を敷(し)いた上(うえ)に吊(つ)って用(もち)いる寝具(しんぐ)の一種(いっしゆ)。

大八車  
荷物運搬用(にもつうんぱんよう)の、二(に)三人(さんに)にさん(さん)でひく大型(おおがた)の二輪車(にりんしゃ)。八人(はちにん)の代(か)わりをする車(くるま)という意(い)と言(い)われている。





# 戦災時の思い出

大阪狭山市 廣瀬 勝(77歳)

わたしは昭和十三年七月生まれです。昭和二十年四月に西宮市にありました建石国民学校へ入学しております。両親は早くから苦勞して黒色の革製の新しいランドセルを準備してくれておりまして、私はそれを得意顔で背負って登校しておりました。

当時学校の校舎、運動場とも日本陸軍の軍隊が一部を占有しておりました、学校側は使用できる教室を二部授業といつて、午前中は低学年が、午後は高学年が使用するという状況でした。

私は下校途中に空襲警報のサイレンが鳴りますと、近くの防空壕に入れて頂いたこともありまして。阪神間の決手には、軍需工場が多くありました関係で、七月以後、米軍機による大規模な空襲を受けております。我が家の場合は夜間でありましたことや、父親が隣保(町内会)の当番の日で、隣保の各家を廻って避難の呼び掛け、確認を行つておりまして、姉と私と弟の三人は、自宅前の畑のはずれにあった防火用水池の水の中に体を浸して待機しておりました。

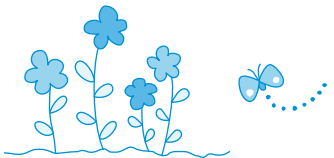
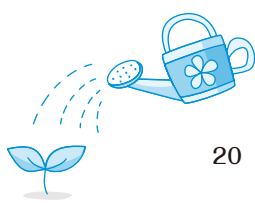
我家を含めた周囲の家々は、全て火の海になり燃え尽きました。

母親は我家の玄関前に投下された焼夷弾の火を消すために、水に浸した布団をかぶせたところ、中の油分が飛び出して顔にかかり、大やけどを受けました。顔ははれあがり、目が見えない状況で、周囲が落ち着いてから病院で治療を受けたと言ふことです。

その時々々の状況判断によりますが、ここの隣保の防空壕に入つていて被弾して亡くなった方もありましたので、我々一家は防火用水池を避難場所として命拾ひしたことになります。

当日の隣保の務めをはたした父親と、防火訓練の教えを守つて行動した母親は共にえらかったと思ひますし、家屋、家財、身の回りの品々は全て焼失しましたが、家族全員無事に生き残れたことがなによりでありました。

以上



「私の戦争体験」〈第38集〉アンケート提出のおねがい

● 配送の担当者またはお店にご提出ください ●

|     |                                                                                                                                                                                                                                                                         |      |  |
|-----|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------|--|
| お名前 | フリガナ                                                                                                                                                                                                                                                                    |      |  |
| 電話  | ( )                                                                                                                                                                                                                                                                     | 市町村名 |  |
| 年齢  | <input type="checkbox"/> 10代 <input type="checkbox"/> 20代 <input type="checkbox"/> 30代 <input type="checkbox"/> 40代 <input type="checkbox"/> 50代 <input type="checkbox"/> 60代 <input type="checkbox"/> 70代 <input type="checkbox"/> 80代 <input type="checkbox"/> その他( ) |      |  |

※お預かりいたしました個人情報は、今後の戦争体験を語り継ぐ活動のみに活用させていただきます。

アンケートにおこたえください

1 「私の戦争体験」をお読みいただきましたか。

(イ) 毎年読んでいる (ロ) 今回初めて読んだ (ハ) 読んだことはない

2 今年の「私の戦争体験」は読みやすかったですか。

(イ) 読みやすい (ロ) 読みにくい

理由:

3 あなたの戦争体験はありますか。

(イ) ある (ロ) ない

● (イ)ある とお答えいただいた方にお聞きします。戦争体験を寄稿していただけますか?

(イ) はい (ロ) いいえ (ハ) その他( )

4 「私の戦争体験」の発行を今後も続けていきたいと思っています。  
体験をお話いただける方をご紹介します。

戦争体験を書いていたただけの方のお名前・連絡先など

|     |  |    |  |     |          |
|-----|--|----|--|-----|----------|
| お名前 |  | 年齢 |  | 連絡先 | 〒 -      |
|     |  |    |  |     | TEL. ( ) |

あなたとの関係・続柄をお書きください( )

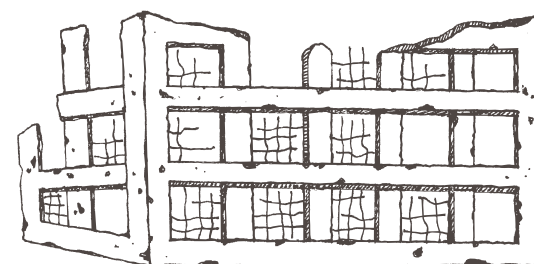
裏面につづく

私の戦争体験

忘れられない光景

東大阪市 新開 千代子(89歳)

大阪空襲、そして毎週のよう、逃げ道に降り注ぐ油脂焼夷弾の束。炎に追われ、疲れ果てた目に、黒焦げの人達が転がっていました。六月にはB29戦闘機400機機銃掃射も福井県に居た時、病院も大規模空爆に狙われました。病児を背負い必死で逃げた先生のその時の光景は忘れられません。敗戦後、喫茶店で隠すようにした、広島長崎原爆投下写真を見た時、地獄を見た目にも、その悲惨さに、ふるえました。言論干渉、弾圧が続いていたのです。現中東の空爆以上が、日本各地で、くり返されていたのです。



油脂焼夷弾  
焼夷剤(しょういざい)にゼリー状(じょう)にしたガソリンを主成分(しゅせいぶん)とするものを用(もち)いた焼夷弾(しょういだん)。  
※焼夷弾(しょういだん)P.4参照(さんしゅう)。

